View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

関西学院大学リポジトリ
Kwansei Gakuin University Repository

ライブエイドが遺したもの

著者	堀 敬一
雑誌名	エコノフォーラム21 ： 学生と教職員のインターコミュニケーション誌
号	25
ページ	53-53
発行年	2019-03-14
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027853

2018年
12月3日
月曜日

ライブエイドが遺したもの

堀　敬一　教授（金融経済学・マクロ経済学）

イギリスのロックバンド、クイーンとそのシンガーであるフレディ・マーキュリーの伝記映画「ボヘミアン・ラプソディ」が大ヒットした。この映画のクライマックスはライブエイドにおけるクイーンのパフォーマンスだが、ライブエイドとはボブ・ゲルドフが主催したアフリカの難民を救済することを目的としたチャリティコンサートである。このコンサートは1985年7月13日、ロンドンのウエンブリー・スタジアムとフィラデルフィアのＪＦＫスタジアムの2ヶ所で延べ12時間開催され、150ヶ国に衛星中継された。

当時、私は高校生でテレビの生中継をずっと観ていたのだが、クイーンが登場する頃はかなりの深夜になっていた。当時の私ですらクイーンは「昔のバンド」であり、あまり興味を持てなかったので寝ても良かったのだが、何となく惰性で見続けていた。しかしそこで繰り広げられた約20分間のパフォーマンスは、映画やＤＶＤ等をご覧になった方ならご存じのはずだが、ロックの歴史に残るほどの凄まじさで、文字通り眠気も吹っ飛んだのだった。今なら現在進行中のイベントに対して他の人がどう思っているか、ＳＮＳを見ればわかるが、当時はインターネットすらない時代。その時のクイーンの素晴らしさは自分の記憶の中に留めておくしかなかったのだが、ライブエイドのＤＶＤが発売される頃には多くの人が同じ印象を持っていたのがわかって、改めて当時の興奮を思い出すこととなった。

とはいえ、実は私は特にクイーンのファンというわけでもなく、当初、映画の「ボヘミアン・ラプソディ」に大して関心を持ってこなかった。しかし昨年の映画公開の直前になってライブエイドがクライマックスであると知り興味を持つようになった。ライブエイドはクイーンにとって記念碑的な瞬間だったことをバンド自身が認めたわけで、しかもあの興奮が多くの人に共有されるとなれば注目せざるを得ない。そして映画は私の予想を遥かに超えて多くの人に受け入れられたのだが、それにしてもクイーンはなぜあそこで完璧な演奏をすることができたのだろうか。

後のインタビューによると、フレディ自身はライブエイドがチャリティであると同時にプロモーションの場になることを自覚していたと告白している。クイーンはバンドとして当時低迷状態にあり、ライブエイドは起死回生のラストチャンスだったようだ。このチャンスに賭けたバンドは渾身のパフォーマンスを披露し、その結果、バンドのイメージを一新することに成功した。事実、ライブエイドの直後からクイーンのアルバムは売れて、ヨーロッパ諸国の全26公演では200万人以上の観客を動員した。

本来の目的であったチャリティ活動としては賛否が分かれるライブエイドではあるが、その後の音楽ビジネスのあり方にも大きな影響を与えたと考えられている。当時はＭＴＶによって音楽市場のグローバル化は既に始まっていたのは事実だが、（当時はテレビの衛星中継なのだが）世界同時にコンテンツを発信することにより多くのリスナーを獲得できることをクイーンはライブエイドの場で証明したことになる。そしてそれが、インターネットを通じて楽曲を世界中に発信する現在の音楽ビジネスの出発点になっていることは言うまでもないだろう。■